

「夏の終わり」

いむいばび子

もうすぐ秋だ。私は未だ、あの夏を引きずってしまっていて、毎年この時期になると思い出す。

私と先輩はサークルで知り合った。お互い顔は知っていたけどちゃんと話したのは私がサークルに入ってから半年くらい経った頃だった。

サークル終わりに、先輩が

「この後ご飯でもどう？」

と、急に声をかけてきた。少し驚いたけど、人当たりが良くていつもみんなと仲良くしている先輩のことだから誰かとお飯に行くことなんていつものことなのだろう。

私は特に予定もなかったし着いていくことにした。それと、前から少し気になっていた。

先輩は行きつけの店がある、と言って私を小洒落たイタリアンレストランへ連れてきた。店内は程よく静かで、いい香りがした。カウンター席とテーブル席を横切り、奥のソファがある個室へと案内された。

「え、こんなVIPな席でいいんですか？！」

「うん、全然大丈夫。ここのマスター、俺の友達なんだよね。」

そういつてほほ笑み、その友達らしいマスターに何やら注文した。

「素敵なお店ですね。どうして今日、急に誘ってくれたんですか？」

「うん、ずっと気になってたんだよね。」

「え？何ゆってるんですか。」

自然な会話をする様にそう言ってきた先輩の目は、真剣で思わず照れてしまった。

ゆっくりお酒を飲みながら、お互いの話を沢山した。見たことのない先輩を見られたり、今まで知らなかった先輩の話を聴けてとても嬉しかった。

先輩の友達のマスターもとても気さくで、私達を見て

「あんたらお似合いだね。」

なんて茶化した。

時間はあっという間に過ぎていき、気付くと終電間近で急いで帰ろうとする私にタクシー代を渡すからもう少しゆっくりしよう、と言ってくれた。

その後も他愛のない話で盛り上がった。こんなに気が合う男性は先輩が初めてだった。

それから、私達はサークル終わりに飲みに行くことが増えた。いつものレストランでお酒を飲んで、私はタクシーで帰る。これがお決まりパターンだった。私は先輩にとって、どういう存在なのだろう。初めて話した時、気になっていると言ってくれたけど、それからは特に何もなかった。気が合う先輩と後輩、友達みたいな関係だった。いつしかそれが苦しくなっていた。先輩との食事も前はあんなに楽しかったのに、その後を期待してはタクシーで一人家に着く。辛かった。

もう少しで一年が経とうとしていた。私は先輩とご飯に行くだけの関係では満足出来なくなっていた。触れたかった。これ以上のが無いのなら、もう会うのはやめようと思っていた。

またいつもの様に、レストランにやってきた。今日こそは先輩にとって私はどういう存在なのか聴こうと思い、いつもより早いペースでお酒を流し込んだ。

「先輩、あの、私達ってなんなんですかね…」

「…。」

先輩は黙って目尻を下げた。

「私、ちょっともう耐えられそうにないです。先輩のことが好きになってしまいました。」

涙が流れた頬を優しく拭った先輩は、ごめんね、と呟いていた。

そしてその日、私は初めて先輩の家に行った。酔った私の頭を優しく撫でて今日はここで寝ていいよ、とソファに横たわる私にタオルケットを掛けてくれた。先輩の家には女性用のポーチやカバンが置いてあって、そこでは全てを悟った。先輩には彼女がいる。そうわかった瞬間、悔しさと虚しさが溢れて更に泣いてしまった。先輩は私が横たわるソファに体をもたれそのまま眠ってしまった。

もう会わないと決めたのに、私は先輩と会うことを辞められなかった。

いつものレストランまで向かう途中、子どもたちが夏を全身に焼き付けてはしゃぐ。その横では大好きな先輩が好きな音楽の話をする。こんなに幸せなのに私は先輩と手を繋ぐことは出来ない。どうしてだろう、どうして先輩は私と一緒にいるのだろう。

「先輩、彼女いるんですね？どうして私とご飯に行ったり、優しくしたりするんですか？やっぱり私、こんなに先輩が好きなのに先輩に触れられないのちょっと辛いです。」

そこまで言った時、先輩は私の手を引き、いつも横切る公園へと入っていった。

先輩は、申し訳なさそうに、一言一言噛み締めるかのように言葉を吐き出した。

先輩には現在付き合っている彼女はいなかった。家にあった化粧品やポーチは二年前に付き合い合っていた彼女のものらしい。彼女は子供が大好きで、先輩との子どもを産むことをとても楽しみにしていたそうだ。

けれどある日、彼女は突然姿を消した。先輩は理由がわからず夢中で彼女を探し回った。警察に届け出を出したり、出来る事は全てしたが、未だに見つかっていないらしい。

先輩は、私のことを好きだと言ってくれた。けれど、手に入れるとまた失ってしまうのではないかという恐怖や、姿を消した婚約者が頭を過ぎり、踏み込めない、と言った。

私達は今もう会うのを辞めることにした。お互いに辛い思いをするくらいなら忘れてしまう方がきつといい。私達は壊れる前に、綺麗な思い出のまま飾っておこう。彼の薬指には、秋の知らせを告げるトンボがそっと優しいキスをした。

夏の終わりになると、私はいつも思い出してしまう。あの日の空の青さと共に帰っていった、子どものいない公園で私達は最後に別れのキスをしたことを。